

プロレタリアートの階級闘争の戦術

マルクスは、プロレタリアートの戦術の基本的任務を、彼の唯物弁証法的世界観のすべての前提に厳密に一致して規定していた。ある社会の、あまさずすべての階級の相互関係の総体を客観的に考慮すること、したがって、この社会の客観的な発展段階をも、この社会と他の諸社会との相互関係をも考慮することだけが、先進的な階級の正しい戦術の土台となりうる。このばあい、すべての階級とすべての国が、静態においてではなく動態において、すなわち、静止の状態においてではなく運動（この運動の諸法則はそれぞれの階級の経済的な生存条件から生まれる）において、考察される。この運動そのものは、過去の観点からだけではなく、また未来の観点からも考察され、しかもゆるやかな変化しか見ない〔進化論者〕の卑俗な考え方によってではなく、弁証法的に考察される。マルクスはエンゲルスへの手紙にこう書いている、「大きな歴史的発展においては二〇年は一日に」も等しい。「もっとも、そのあとで、二〇年を一つに圧縮した数日がかかることもあるが」（『往復書簡集』第三巻、127 ページ）。どの発展段階にも、どの時機にも、プロレタリアートの戦術は、この、客観的に避けられない、人類史の弁証法を考慮に入れて、一方では、先進的な階級の意識と力と闘争能力を発展させるために、政治的停滞の時期、または亀の歩みのようにのろくさい、いわゆる「平和的」発展の時期を利用するとともに、他方では、その階級の運動の「終局目標」の方向で、「二〇年を一つに圧縮した」偉大な日々がきたとき偉大な任務を実践的に解決できる能力をこの階級のうちにつくりだす方向で、この利用の活動全体をおこなわなければならない。

……マルクスは、政治的に停滞し、ブルジョアの合法性が支配している時期に、合法的闘争手段を利用することの価値を十分にみとめていたから、社会主義者取締法が発布されたあとの1877～1878年には、モストの「革命的空文句」をはげしく非難したが、しかし、公式の社会民主党が、取締法にこたえて、剛毅と堅固さと革命的精神と非合法闘争にうつる決意とをすぐさましめさず、一時日和見主義に支配されたのにたいしては、前者のばあいにまさるともおとらぬ激しさで、攻撃をくわえた（『マルクス＝エンゲルス往復書簡集』第4巻、397、404、418、422、424 ページ。さらにゾルゲへの手紙をも参照せよ）。

注) ………は青山の略

第21巻 P63、67『カール・マルクス』

1914年7～11月に執筆

コメント

今の私達は、先進的な階級の意識と力と闘争能力を発展させるために、政治的停滞の時期、または亀の歩みのようにのろくさい、いわゆる「平和的」発展の時期を利用する。

その階級の運動の「終局目標」の方向で、「二〇年を一つに圧縮した」偉大な日々がきたとき偉大な任務を実践的に解決できる能力をこの階級のうちにつくりだす方向で、剛毅と堅固さと革命的精神をもって、この利用の活動全体をおこなわなければならない。